

2017年告示保育所保育指針からみる幼児と保育者の愛着形成に関する支援

鹿児島純心女子大学大学院 井上 祐子

和文要旨

本研究は、幼児期における保育とボウルビーが提唱した愛着行動との関係について整理し、幼児と保育者の愛着形成に関する支援について検討することを目的とした。方法は、2017年告示保育所保育指針、及び保育所保育指針解説を用いて、文献研究を行った。この結果、幼児と保育者の愛着形成に関する支援として、幼児期における保育と、幼児期の愛着行動である「探索行動」「目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解」「目標修正的協調性の形成」「内的作業モデル」との関係を示した。以上の結果は、保育者養成において学ぶ学生が、幼児と保育者の愛着形成に関する支援について理解を深めるための一助になることを示唆するものである。

キーワード：2017年告示保育所保育指針 保育所保育指針解説 愛着行動 幼児期における保育 愛着形成

I. 序論

近年、核家族化や地域のつながりの希薄化の進行、共働き家庭の増加等を背景に、身近な人々から子育てに対する協力や助言を得られにくい状況に置かれている保護者も多く、保護者とともに子どもの愛着形成に影響を与える存在として、保育者に対する期待が高まってきている。

愛着とは、保護者や特定の保育者と乳幼児の間にある相互的な絆のことであり、提唱者であるボウルビーは、乳幼児期に愛着を形成することが、子どもの人格形成に大きな影響を与えるとした。この愛着については、2017年に告示された保育所保育指針（以下、「保育指針」という）、及びその浸透や趣旨の理解の助けとなる保育所保育指針解説（以下、「保育指針解説」という）においても、特に1歳以上3歳未満児の保育では、「身近な保育士等との愛着を抛りどころにして、少しずつ自分の世界を拡大していく」（厚生労働省2018a；144）、3歳以上児の保育では、「人に対する信頼感に支えられて、自分自身の生活を確立していく」（厚生労働省2018a；211）と記されており、子どもの愛着形成に影響を与える存在として保育者が示されている。

また、1・2歳児、及び3歳以上児について、保育所等関連状況取りまとめ¹⁾（厚生労働省2015；厚生労働省2016；厚生労働省2017a；厚生労働省2018b；厚生労働省2019）によると、年齢区分別の保育所等利用児童の割合（保育所等利用率²⁾³⁾）についてともに年々増加している⁴⁾。この社会情勢を受けて、保育指針では、1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容として5領域が示され、3歳以上児とは別に項目を設けることにより、記載内容の充実が図られた（厚生労働省社会保障審議会児童部会保育専門委員会2016；厚生労働省子ども家庭局保育課2017a；厚生労働省子ども家庭局保育課2017b）。このように幼児期の保育の重要性は、増す一方である。

しかし、少子化等の社会構造の変化から、幼児と触れ合う経験が乏しいまま保育者となる学生が増えてきている。保育実習における不安要素に関する先行研究（高橋ら2007；中西2008；中西2009；中西2010；三澤2015）では、子どもとの関係づくりに対して学生が不安を感じていることが明らかにされている。現在、幼児期の保育の重要性が増す一方にある中で、子どもの愛着形成に影響を与える存在として、保育者に対する期待

が高まっていることから、幼児と保育者の愛着形成に関する支援について研究を蓄積し、保育者養成に還元していくことは喫緊の課題と考えられる。

そこで、本研究は、より実践力のある保育者養成の一助となることをねらいとして、幼児と保育者の愛着形成に関する支援について検討することを目的とする。

II. 方法

保育指針 第2章保育の内容「2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」「3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」(厚生労働省2017b:17-48)、及び保育指針解説(厚生労働省2018a:131-273)をもとに、ボウルビーが提唱した愛着行動(Bowlby=1991:290-297)との関係を整理する。なお、保育の内容については、保育指針に記されている附番をそのまま引用する。

愛着行動について、ボウルビーは発達過程を4段階に区分した。第1段階では生後3か月までは人体弁別はせず、第2段階では生後6か月頃から人を区別して愛着行動をみせるようになるとした。第3段階では、生後6か月頃から2、3歳にかけて特定の人物に対する愛着が明確化し、人見知りや後追い行動をするようになるとした。また、愛着対象との接近を保ちながら、次第に移動の範囲を広げ探索行動を行なうようになるとした(鈴木・滝口2016:68)。さらに、第3段階の間に、愛着対象への接近の維持とともに、目標修正的システムを用いるようになり、愛着対象の永続性等について考えられるようになるとした(Bowlby=1991:315-316;初塚2010:5)。第4段階では、2、3歳以降になると、養育者の行動等を観察し、目標や計画等を推察して、自分自身の行動や目標

を修正する、目標修正的協調性を形成するようになるとした(Bowlby=1991:315-316)。また、認知能力が発達し、本当に必要な場合には、養育者を得られることが保証されているという確信・イメージ(内的作業モデル)が子どもの中に内在化され、心の拠り所となり、満足で安全な気持ちを持つことができるとした(Bowlby=1991:417-419;初塚2010:5)。

本研究では、幼児と保育者の愛着形成に関する支援について検討することから、児童福祉法第4条における幼児の定義に基づき、上記4段階のうち、幼児期に該当する第3~4段階においてみられる愛着行動に着目することにする。

なお、倫理的配慮として、「日本社会福祉学会研究倫理指針 第2 指針内容 A 引用」に基づき、先行業績の検討に際しては、現著者名・文献・出版社・出版年・引用箇所を明示し、自説と他説との峻別を行った。

III. 結果

以下に、保育指針及び保育指針解説をもとに、ボウルビーが示した「探索行動」「目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解」「目標修正的協調性の形成」「内的作業モデル」との関係について整理した内容を記す。

III-1. 探索行動に対する、幼児と保育者の愛着形成に関する支援

保育指針において、探索行動とかかわりのある内容は、1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容「環境」における「① 安全で活動しやすい環境での探索活動等を通して、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。」(厚生労働省2017b:29)であった(表1)。

表1 探索行動と保育指針における保育の内容との関係

愛着行動	保育指針における保育の内容	
	内容	領域
探索行動	① 安全で活動しやすい環境での探索活動等を通して、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。	1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容「環境」

筆者作成(資料)①保育指針(厚生労働省2017b:29)、②生涯発達心理学 認知・対人関係・自己から読み解く(鈴木・滝口2016:68)、③母子関係の理論 I 愛着行動(Bowlby=1991:251-252)。

保育指針解説（厚生労働省2018a:153-154）では、「探索行動」にあたる部分として、以下の2点があげられていた（表2）。

まず、「安心できる保育士等の存在を抛りどころにして、活発な探索活動が促される。」という幼児の状況に対し、保育者の援助として「子どもの行動や手の届く範囲などを踏まえて安全や活動のしやすさに配慮する。」があげられており、こうした援助によって幼児は、「豊かな感覚や感性が培われていく。」という経験につながるとされ

ていた。

次に、「保育士等に信頼を寄せる。」という幼児の状況に対し、保育者の援助として「何か困ったことや怖いことがあった時には慰めたり助けたりしてくれる安全基地のような存在として近くにいる。」があげられており、こうした保育者の援助によって幼児は、「情緒が安定し、好奇心をもって周囲の人やものに関わってみようとする。」という経験につながるとされていた。

表2 探索行動における、幼児と保育者の愛着形成に関する支援

愛着行動	幼児と保育者の愛着形成に関する支援		
	幼児の状況	保育者の援助	保育者の援助が幼児に及ぼす影響
探索行動	安心できる保育士等の存在を抛りどころにして、活発な探索活動が促される。	子どもの行動や手の届く範囲などを踏まえて安全や活動のしやすさに配慮する。	豊かな感覚や感性が培われていく。
	保育士等に信頼を寄せる。	何か困ったことや怖いことがあった時には慰めたり助けたりしてくれる安全基地のような存在として近くにいる。	情緒が安定し、好奇心をもって周囲の人やものに関わってみようとする。

筆者作成（資料）①保育指針解説（厚生労働省2018a:153-154）、②生涯発達心理学 認知・対人関係・自己から読み解く（鈴木・滝口2016:68）、③母子関係の理論Ⅰ 愛着行動（Bowlby=1991:251-252）。

Ⅲ-2. 目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解に対する、幼児と保育者の愛着形成に関する支援

保育指針において、「目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解」とかかわりのあ

る内容は、1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容「人間関係」における「② 保育士等の受容的・応答的な関わりの中で、欲求を適切に満たし、安定感をもって過ごす。」（厚生労働省2017b:27）であった（表3）。

表3 目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解と保育指針における保育の内容との関係

愛着行動	保育指針における保育の内容	
	内容	領域
目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解	② 保育士等の受容的・応答的な関わりの中で、欲求を適切に満たし、安定感をもって過ごす。	1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容「人間関係」

筆者作成（資料）①保育指針（厚生労働省2017b:27）、②アタッチメント(愛着)理論から考える保育所保育のあり方（初塚2010:5）、③母子関係の理論Ⅰ 愛着行動（Bowlby=1991:315-316）。

保育指針解説（厚生労働省2018a:146）では、「目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解」にあたる部分は、「自分の考えや思いが受け止められた喜びを感じると同時に、保育士等の思いに次第に気付くようになる。」という幼児の状況が示されていた。これに対し、保育者の

援助として「受容的・応答的な関わりを行う。」があげられており、こうした保育者の援助によって幼児は、「自分で考えて自分でしようとする意欲や諦めずにやり遂げようとする気持ちの芽生えが培われる。」という経験につながるとされていた（表4）。

表4 目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解における、幼児と保育者の愛着形成に関する支援

愛着行動	幼児と保育者の愛着形成に関する支援		
	幼児の状況	保育者の援助	保育者の援助が幼児に及ぼす影響
目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解	自分の考えや思いが受け止められた喜びを感じると同時に、保育士等の思いに次第に気付くようになる。	受容的・応答的な関わりを行う。	自分で考えて自分でしようとする意欲や諦めずにやり遂げようとする気持ちの芽生えが培われる。

筆者作成 (資料) ①保育指針解説 (厚生労働省2018a:146), ②アタッチメント(愛着)理論から考える保育所保育のあり方 (初塚2010:5), ③母子関係の理論 I 愛着行動 (Bowlby=1991:315-316)。

Ⅲ-3. 目標修正的協調性の形成に対する、幼児と保育者の愛着形成に関する支援

保育指針において、「目標修正的協調性の形成」とかかわりのある内容は、1歳以上3歳未満児の

保育に関するねらい及び内容「人間関係」における「④ 保育士等の仲立ちにより、他の子どもとの関わり方を少しずつ身につける。」(厚生労働省2017b:27)であった(表5)。

表5 目標修正的協調性の形成と保育指針における保育の内容との関係

愛着行動	保育指針における保育の内容	
	内容	領域
目標修正的協調性の形成	④ 保育士等の仲立ちにより、他の子どもとの関わり方を少しずつ身につける。	1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容「人間関係」

筆者作成 (資料) ①保育指針 (厚生労働省2017b:27), ②母子関係の理論 I 愛着行動 (Bowlby=1991:315-316)。

保育指針解説 (厚生労働省2018a:147) では、「目標修正的協調性の形成」にあたる部分は、「対人的な場面でその状況に応じた適切な行動や言い方があることに気付く。」という幼児の状況が示されていた。これに対し、保育者の援助として「具体的な関わり方の見本を実際に行ってみたり言っ

てみたりして示す。」があげられており、こうした保育者の援助によって幼児は、「自分の思いを相手に伝えることができるようにするとともに、相手にも思いがあることに気付く。」という経験につながるとされていた(表6)。

表6 目標修正的協調性の形成における、幼児と保育者の愛着形成に関する支援

愛着行動	幼児と保育者の愛着形成に関する支援		
	幼児の状況	保育者の援助	保育者の援助が幼児に及ぼす影響
目標修正的協調性の形成	対人的な場面でその状況に応じた適切な行動や言い方があることに気付く。	具体的な関わり方の見本を実際に行ってみたり言ってみたりして示す。	自分の思いを相手に伝えることができるようにするとともに、相手にも思いがあることに気付く。

筆者作成 (資料) ①保育指針解説 (厚生労働省2018a:147), ②母子関係の理論 I 愛着行動 (Bowlby=1991:315-316)。

Ⅲ-4. 内的作業モデルに対する、幼児と保育者の愛着形成に関する支援

保育指針において、「内的作業モデル」とかかわりのある内容は、3歳以上児の保育に関するね

らい及び内容「人間関係」における「③ 自分では自分です。」「④ いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。」(厚生労働省2017b:38)であった(表7)。

表7 内的作業モデルと保育指針における保育の内容との関係

愛着行動	保育指針における保育の内容	
	内容	領域
内的作業モデル	③ 自分でできることは自分です。	3歳以上児の保育に関するねらい及び内容「人間関係」
	④ いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。	3歳以上児の保育に関するねらい及び内容「人間関係」

筆者作成(資料)①保育指針(厚生労働省2017b:38), ②アタッチメント(愛着)理論から考える保育所保育のあり方(初塚2010:5), ③母子関係の理論Ⅰ 愛着行動(Bowlby=1991:417-419)。

保育指針解説(厚生労働省2018a:214-216)では、「内的作業モデル」にあたる部分として、以下の2点があげられていた(表8)。

まず、「保護者や保育士等を心の拠りどころとしながら、行きつ戻りつする。」という幼児の状況に対し、保育者の援助として「困ったことが起きる時、援助の求めに応じる。」があげられており、こうした保育者の援助によって幼児は、「次

第に自立へと向かっていく。」という経験につながるとされていた。

次に、「信頼する保育士等に温かく見守られ、支えられていると感じる。」という幼児の状況に対し、保育者の援助として「必要に応じて適切な援助を行う。」があげられており、こうした保育者の援助によって幼児は、「次第に自立へと向かっていく。」という経験につながるとされていた。

表8 内的作業モデルにおける、幼児と保育者の愛着形成に関する支援

愛着行動	幼児と保育者の愛着形成に関する支援		
	幼児の状況	保育者の援助	保育者の援助が幼児に及ぼす影響
内的作業モデル	保護者や保育士等を心の拠りどころとしながら、行きつ戻りつする。	困ったことが起きる時、援助の求めに応じる。	次第に自立へと向かっていく。
	信頼する保育士等に温かく見守られ、支えられていると感じる。	必要に応じて適切な援助を行う。	諦めずにやり遂げることができる。

筆者作成(資料)①保育指針解説(厚生労働省2018a:214-216), ②アタッチメント(愛着)理論から考える保育所保育のあり方(初塚2010:5), ③母子関係の理論Ⅰ 愛着行動(Bowlby=1991:417-419)。

IV. 考察

本研究は、より実践力のある保育者養成の一助となることをねらいとして、幼児と保育者の愛着形成に関する支援について検討することを目的とした。そこで、保育指針(厚生労働省2017b:17-48)、及び保育指針解説(厚生労働省2018a:131-273)をもとに、ボウルビーが提唱した愛着行動(Bowlby=1991:290-297)との関係を整理した。

まず、「探索行動」では、「子どもの行動や手の届く範囲などを踏まえて安全や活動のしやすさに配慮する。」という支援が示されており、この支援によって、幼児は「豊かな感覚や感性が培われていく。」ことを経験するとされていた。また、

「何か困ったことや怖いことがあった時には慰めたり助けたりしてくれる安全基地のような存在として近くにいる。」という支援が示されており、この支援によって、幼児は「情緒が安定し、好奇心をもって周囲の人やものに関わってみようとする。」ことを経験するとされていた。

次に、「目標修正的システムによる、愛着対象の永続性等の理解」では、「受容的・応答的な関わりを行う。」という支援が示されており、この支援によって、幼児は「自分で考えて自分でしようとする意欲や諦めずにやり遂げようとする気持ちの芽生えが培われる。」ことを経験するとされていた。

さらに、「目標修正的協調性の形成」では、「具体的な関わり方の見本を実際に行ってみたり言ってみたりして示す。」という支援が示されており、この支援によって、「自分の思いを相手に伝えることができるようにするとともに、相手にも思いがあることに気付く。」ことを経験するとされていた。

最後に、「内的作業モデル」では、「困ったことが起きる時、援助の求めに応じる。」という支援が示されており、この支援によって、幼児は「次第に自立へと向かっていく。」ことを経験するとされていた。また、「信頼する保育士等に温かく見守られ、支えられていると感じる。」という支援が示されており、この支援によって、幼児は「諦めずにやり遂げることができる。」ことを経験するとされていた。

上記の保育者による支援と幼児による経験の積み重ねが、幼児と保育者の愛着形成につながると考えられる。今回得られた知見を保育者養成に還元していくことは、幼児と触れ合う経験が乏しいまま保育者となる学生が増えてきている中、子どもとの関係づくりに不安を抱える学生に対して、幼児と保育者の愛着形成に関する支援について学生が理解を深める一助になると考えられる。

注釈

- 1) 全国の保育所等の状況を把握することを目的に毎年実施している。
- 2) 平成27年度の調査から、従来の保育所に加え、平成27年4月に施行した子ども・子育て支援新制度において新たに位置づけられた幼保連携型認定こども園等の特定教育・保育施設と特定地域型保育事業（うち2号・3号認定）の数値を含んでいる。特定教育・保育施設とは、幼保連携型認定こども園、幼稚園型認定こども園及び地方裁量型認定こども園であり、特定地域型保育事業とは、小規模保育事業、家庭的保育事業、事業所内保育事業及び居宅訪問型保育事業である。
- 3) 保育所等利用率は、当該年齢の保育所等利用児童数÷当該年齢の就学前児童数によって求められている。
- 4) 保育所等関連状況取りまとめ（厚生労働省2015：厚生労働省2016：厚生労働省2017：厚生労働省2018：厚生労働省2019）によると、年齢区分別の保育所等利用児童の割合（保育所等利用率）について、1・2歳児は、平成27年4月で

は793,278人（38.1%）、平成28年4月では837,949人（42.2%）、平成29年4月では884,514人（45.7%）、平成30年4月では921,313人（47.0%）、平成31年4月では943,470人（48.1%）と年々増加している。また、3歳以上児も、平成27年4月では1,452,774人（46.0%）、平成28年4月では1,483,551人（47.7%）、平成29年4月では1,515,183人（49.3%）、平成30年4月では1,543,144人（51.4%）、平成31年4月では1,583,401人（53.7%）と年々増加している（厚生労働省2015：厚生労働省2016：厚生労働省2017：厚生労働省2018：厚生労働省2019）。

文献

- 初塚眞喜子（2010）「アタッチメント（愛着）理論から考える保育所保育のあり方」『相愛大学人間発達学研究』1, 1-16.
- John Bowlby. (1982) Attachment and Loss, Vol.1 Attachment: The Tavistock Institute of Human Relations. (=1991, 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一訳『母子関係の理論 I 愛着行動』岩崎学術出版社.)
- 厚生労働省（2015）「保育所等関連状況取りまとめ（平成27年4月1日）」
<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujdoukateikyoku-Hoikuka/0000098603.pdf>, 2019.1.20)
- 厚生労働省（2016）「保育所等関連状況取りまとめ（平成28年4月1日）」
https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujdoukateikyoku-Hoikuka/0000098603_2.pdf, 2019.1.20)
- 厚生労働省（2017a）「保育所等関連状況取りまとめ（平成29年4月1日）」
<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujdoukateikyoku-Hoikuka/0000176121.pdf>, 2019.1.20)
- 厚生労働省（2017b）「保育所保育指針」
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujdoukateikyoku/0000160000.pdf>, 2018.12.12)
- 厚生労働省（2018a）「保育所保育指針解説」
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujdoukateikyoku/0000202211.pdf>, 2019.12.3)
- 厚生労働省（2018b）「保育所等関連状況取りまとめ（平成30年4月1日）」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000350592.pdf>, 2019.1.20)
- 厚生労働省（2019）「保育所等関連状況取りまとめ（平成31年4月1日）」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000544879.pdf>, 2019.1.20)
- 厚生労働省子ども家庭局保育課（2017a）「保育所保育指針の改定について」

- (<https://www.tcs.wv.ac.jp/bukai/hoiku/documents/29hoikushishin-2.pdf>, 2018.12.12)
- 厚生労働省子ども家庭局保育課 (2017b) 「0歳児の保育内容の記載のイメージ」
(https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/04_1.pdf, 2018.12.12)
- 厚生労働省社会保障審議会児童部会保育専門委員会 (2016) 「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめの概要(案)」
(https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/02_1.pdf, 2018.12.12)
- 三澤恵 (2015) 「保育者養成校の学生の実習における対人コミュニケーション不安の考察：乳幼児・保育者・保護者に対するコミュニケーション不安の自由記述の分析」『子ども未来学研究』10, 23-34.
- 中西和子 (2008) 「保育実習における不安の変容に関する一考察(1)」『日本教育心理学会総会発表論文集』50,265.
- 中西和子 (2009) 「保育実習における不安の変容に関する一考察(2):グループワークを多用した準備授業の影響」『日本教育心理学会総会発表論文集』51,267.
- 中西和子 (2010) 「保育実習における不安の変容に関する一考察(3):グループワークを多用した準備授業の影響」『日本教育心理学会総会発表論文集』52,668.
- 鈴木忠・滝口のぞみ (2016) 「第4章 他者との関係性のはじまり」鈴木忠・飯牟礼悦子・滝口のぞみ『生涯発達心理学 認知・対人関係・自己から読み解く』有斐閣アルマ, 61-77.
- 高橋秀典・島崎保・井上光一・森脇裕美子・中磯子・田中麻貴 (2007) 「保育実習前の実習生の不安要因」『日本教育心理学会総会発表論文集』49,183.

The support for the development of attachment between children aged from 1 to 3, children aged from 3 or older, and nursery teacher based on the Nursery care guidelines (Ministry of Health, Labour and Welfare Notification No. 117, 2017).

INOUE yuko

In this study, it's aimed to organize the involvement of childcare in early childhood and attachment behavior advocated by Bowlby , and consider support for the development of attachment between children aged from 1 to 3, children aged from 3 or older, and nursery teacher.

The method was a literature study on Nursery care guidelines (Ministry of Health, Labour and Welfare Notification No. 117, 2017), and the commentary on Nursery care guidelines.

As a result, it was discovered the involvement of childcare in early childhood and “exploratory behavior”, “understanding the persistence of attachment figure based on goal-corrected system”, “the development of goal-corrected partnership” , and “internal working model” , which are attachment behaviors in early childhood as support for the development of attachment between children aged from 1 to 3, children aged from 3 or older, and nursery teacher.

The above results suggest that students studying in designated nursery teacher training facilities may help to deepen their understanding of support for the development of attachment between children aged from 1 to 3, children aged from 3 or older, and nursery teacher.

Key words :Nursery care guidelines (Ministry of Health, Labour and Welfare Notification No. 117, 2017) , the commentary on Nursery care guidelines, attachment behavior , childcare in early childhood , the development of attachment